



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|------------------|---|
| Title | 生活保護世帯の子どもの生活と意識 |
| Author(s) | 小西, 祐馬; KONISHI, Yuma |
| Citation | 教育福祉研究, 9, 9-22 |
| Issue Date | 2003-03 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/28356 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 9_P9-22.pdf |



生活保護世帯の子どもの生活と意識

小西 祐馬

はじめに

本論文の目的は、生活保護世帯・低所得世帯の子どもの生活・行動と、意識を明らかにすることである。現代の貧困・低所得問題の研究を進めていくうえで、子どもに関する考察は欠かせない視点であると考え、生まれながらにして、もしくは発達段階の途中から低所得という不利の中におかれた子どもたちの過去・現在の生活と意識、そして将来展望を聞き取り調査によって把握する。

わが国における貧困・低所得層の子どもに関する研究では、これまで量的な調査によって、中卒・高校中退の子どもが多く、その後の労働生活でも安定が得られていないこと、また学校での成績や登校状況、世帯が教育にかける費用などの点で多くの不利を背負っていることが明らかにされている^①。中でも、荻谷が示した努力（学習時間）と意欲（興味・関心）の社会階層間における格差が拡大しているといった事実は注目に値する。このことが意味するのは、機会は均等であり、努力によっては誰にも門戸が開かれていたはずのメリトクラシー社会は、実はその努力自体が家庭のバックグラウンドによって規定されてしまっている非常に不平等なものであるという事実である^②。

また、本論文と同様に子どもに対する聞き取り調査をもとに論じたものとして、長谷川の論稿が挙げられる^③。ある公営住宅の低所得世帯に対する調査をもとに、その世帯の子ども・青年の大半が学校「不適応」にあることを確認した上で、不登校・高校不進学・高校中退のいずれかを経験した9名の青年に対象を限定して、インタビュー調査を行っている。その結果、現在の仕事に充実感を持って取り組んでおり、「現在を積極的に受け

止める青年たち」がいる一方で、その後の生活に積極的な意味を見出せずに、「浮遊」状態にあると捉えられる子ども・青年たちがいることが示された。

一方で、養護施設や教護院（現・児童自立支援施設）など施設で暮らす（暮らしていた）子どもに関する研究は、ある程度蓄積されてきている^④。学齢期児童の低学力や不登校、非行などの問題の存在、そして施設を退所した後も底辺的な労働に従事している等の事実が明らかにされていると同時に、貧困の世代的再生産の一端が部分的に示唆されてきている。しかし、貧困・低所得という問題意識から接近している研究は少なく、単なる追跡調査にとどまっている面もある。低所得世帯の子どもに関する考察を深めるためには、施設からの文脈のみでは不十分であり、やはり地域で暮らす「接近の難しい」子どもたちに対する考察を進めていく必要がある。

この他にも、教育社会学を中心に、「階層と教育」といった視点からの研究は多数存在する。しかし、これらの研究は低階層の子どもを論じていたとしても、子どもの進路決定や学力格差、もしくは家庭の文化資本などを社会階層論の視点から切り取ったものであって、子どもそのものを把握するという意味では、断片的な把握の域を出るものではない。当事者である子ども・青年の生活全体、子ども自身が現在の生活をどのように捉えているか、そして未来をどのように展望しているのかといったことを把握しているものは、これまでほぼなかったと言って良い。これらを明らかにするには、多くの研究が採用している量的調査では限界があり、質的な聞き取り調査を行う必要があると考えられるが、先述した長谷川のもの以外、

管見の限りでは見当たらない。長谷川の論稿に關しても、子どもの学校体験とその後の労働生活に焦点が当てられており、家庭の背景も含めた包括的な視点から行われたものではない。これまで明らかにされてきた、低所得世帯の子どもの学校、地域、家庭、そして労働市場における不利の様態に関する考察をより深めるためには、その子どもたちのトータルな現状分析を進める必要がある。生活全般を把握するとともに、子どもたちの意識・思いを聞き取り、世帯が低所得であるということがいかなる形でその子ども自身の問題となつて出現しているのか、これらを生活史分析的に把握する必要があるだろう。

以下、2001年に行われた量的調査で低所得世帯とその子どもの状態を確認した後に、筆者の行った聞き取り調査の結果について検討を進める。

1 低所得世帯の現状と子どもの生活の諸断面

ここでは2001年に行われた「子どもの生活状況に関するアンケート調査⁽⁶⁾」の結果に基づいて、社会階層と子どもの生活の関係をみておく。これは、北海道内の子どもと親に対して行われたものであり、貧困・低所得世帯とその子どもの状況を、生活全般から明らかにすることを試みた数少ない調査である。ここで明らかになった事実を概観すると同時に、残された課題を整理する。

<親調査から>

調査の結果は、表1にまとめた。ここから明らかになったことは、世帯の収入や職業、世帯類型などで不利な層（年収400万円以下、パート・無職、母子世帯）の子どもたちが、学校生活を中心としたさまざまな面で不利な状況に置かれてい

表1 社会階層と子どもの生活

(単位：人、%)

| 学年段階、職業、年収、世帯類型区分 | 学年段階、職業、年収、世帯類型別総数 | 学校を「時々休む」、「よく休む」 | 子ども専用の部屋がある | 塾・家庭教師を頼んでいる(中学2年のみ) | 学校の成績「できないほう」 | 仲のよい友だち「いないと思う」、「わからない」 | 教育費の負担「かなり大変」 |
|-------------------|--------------------|------------------|-------------|----------------------|---------------|-------------------------|---------------|
| 全体計 | 1,023 | 6.4 | 67.6 | — | 15.7 | 3.1 | 34.9 |
| 小学2年 | 265 | 6.4 | 47.3 | — | 6.1 | 2.3 | 24.7 |
| 小学5年 | 260 | 7.8 | 63.0 | — | 8.1 | 4.3 | 34.6 |
| 中学2年 | 480 | 5.7 | 81.5 | 33.0 | 25.3 | 3.0 | 40.6 |
| 自営業 | 144 | 4.2 | 67.4 | 46.0 | 18.9 | 0.7 | 33.1 |
| 公務員 | 150 | 5.3 | 76.0 | 40.0 | 10.1 | 2.0 | 29.7 |
| 民間企業 | 937 | 3.9 | 70.6 | 48.4 | 13.8 | 3.4 | 35.1 |
| パート・臨時 | 55 | 12.7 | 47.3 | 11.1 | 19.2 | 5.7 | 37.3 |
| その他の | 87 | 8.3 | 55.2 | 18.1 | 23.0 | 2.3 | 41.0 |
| 無職 | 19 | 1.1 | 57.9 | 25.0 | 26.3 | 5.3 | 42.1 |
| ～200万円 | 72 | 15.5 | 54.2 | 22.2 | 15.5 | 7.0 | 46.3 |
| ～300万円 | 157 | 8.3 | 51.3 | 25.4 | 18.1 | 1.3 | 46.3 |
| ～400万円 | 147 | 7.5 | 63.9 | 23.9 | 22.4 | 4.1 | 32.1 |
| ～500万円 | 164 | 8.6 | 69.9 | 40.0 | 13.6 | 4.2 | 37.9 |
| ～700万円 | 218 | 5.1 | 77.5 | 49.1 | 11.1 | 1.4 | 36.4 |
| ～1,000万円 | 109 | 4.6 | 78.9 | 49.2 | 15.7 | — | 26.9 |
| 1,000万円～ | 53 | 1.9 | 71.9 | 65.6 | 9.4 | — | 35.8 |
| 父母+子 | 655 | 6.2 | 70.8 | 43.1 | 14.7 | 2.6 | 34.3 |
| 父母子+祖父母 | 195 | 4.1 | 64.4 | 42.0 | 17.1 | 3.6 | 39.3 |
| 父+子 | 5 | — | 60.6 | — | 20.0 | — | 20.0 |
| 父子+祖父母 | 17 | 5.9 | 64.7 | 20.0 | 11.8 | — | 26.7 |
| 母+子 | 90 | 11.2 | 56.3 | 23.2 | 20.2 | 5.7 | 34.9 |
| 母子+祖父母 | 23 | 4.3 | 56.5 | 54.6 | — | — | 36.8 |
| その他の | 19 | 10.5 | 57.9 | 50.0 | 31.6 | — | 29.4 |

(出所) 栗田克実「北海道における子どもの生活状況」北海道大学大学院教育学研究科、修士論文、2002年より作成。以下、表2、表3も同じ。

る、という事実である。塾や習い事、教育費など経済的なことに直接起因する項目での格差が明確に存在すると同時に、食事や登校、遊び、友人関係などの生活一般においても格差が生じている。とりわけ重要だと思われる学力に関しては、年収で見るとその格差は他の項目に比べそれほど顕著なものとはなっていないが、職業での「公務員」と「パート」、「無職」との差は非常に大きなものとなっていることがわかる。

<子ども調査から>

子どもへの調査に関しては、正確な所得を把握することができていないため、階層間格差について検討することは困難であるが、ここではひとつの指標として、「家庭生活での悩み」に関する設問で、「家の収入や職業のこと」に関して悩みがあると回答した子どもに注目する。

表2と表3⁶⁾からは、学校生活と家庭生活での悩みについて、「家の収入や職業のこと」での悩み

の有無との関連がわかる。これを見ると、学校生活と家庭生活のどちらにおいても、また小学生でも中学生でも、収入や職業に悩みがある子どもは、他の項目においても高い割合で「悩みがある」としている。このことが意味するのは、「家の収入や職業」に不安・悩みがある子どもには、様々な問題が複雑に絡まりあって存在し、不安や悩みが重層的に現れているということである。

ここで確認したことは、今日においても低所得世帯とその子どものある一定部分が、様々な不利を背負い、またその不利の連鎖に絡め取られていることを意味する。しかしながら、これらの調査では明らかにならなかったこともある。ひとつは、子どもの将来展望に関して、どの段階までの進学を希望するかという形で聞いており、仕事を含めた具体的な展望は明らかになっていない。進路選択を迫られている高校生年代の子どもも視野に入れ、具体的な将来展望と、その背景にある思

表2 学校生活への不安・悩み (単位：%)

| | 家の収入や職業に悩みが | | 全体計 | |
|----|-------------|------|------|------|
| | ある | ない | | |
| 小5 | 1. 授業や成績のこと | 64.1 | 40.1 | 44.4 |
| | 2. 友人との関係 | 69.8 | 33.2 | 39.7 |
| | 3. 異性のこと | 35.5 | 16.1 | 19.5 |
| | 4. 先生との関係 | 31.3 | 9.9 | 13.7 |
| 中2 | 1. 授業や成績のこと | 87.3 | 77.0 | 79.7 |
| | 2. 友人との関係 | 59.9 | 41.8 | 6.5 |
| | 3. 異性のこと | 46.1 | 27.3 | 32.1 |
| | 4. 先生との関係 | 24.6 | 20.2 | 21.4 |

表3 家庭生活への不安・悩み (単位：%)

| | 家の収入や職業に悩みが | | 全体計 | |
|----|-------------------|------|------|------|
| | ある | ない | | |
| 小5 | 1. 家族で一緒に楽しむことがない | 43.5 | 16.3 | 21.4 |
| | 2. 祖父母と共に暮らしていること | 18.6 | 11.0 | 13.2 |
| | 3. 家が狭い | 35.8 | 20.2 | 23.2 |
| | 4. 親が自分をわかってくれない | 32.4 | 19.5 | 22.7 |
| | 5. 父母の言うことが違う | 31.8 | 17.3 | 19.9 |
| | 6. 親が厳しい | 41.2 | 27.9 | 30.6 |
| | 7. 家の中での争いごと | 30.9 | 19.5 | 21.6 |
| 中2 | 1. 家族で一緒に楽しむことがない | 23.9 | 10.9 | 14.2 |
| | 2. 祖父母と共に暮らしていること | 12.2 | 5.7 | 7.4 |
| | 3. 家が狭い | 45.8 | 19.0 | 25.8 |
| | 4. 親が自分をわかってくれない | 40.1 | 22.6 | 27.2 |
| | 5. 父母の言うことが違う | 30.9 | 19.0 | 22.1 |
| | 6. 親が厳しい | 53.2 | 32.6 | 37.8 |
| | 7. 家の中での争いごと | 36.6 | 12.7 | 18.9 |

いにより深く迫っていく必要がある。今ひとつの課題は、やはり不安や悩み、そして不利の連鎖の構造を具体的に把握することができていないことである。特に「家の収入や職業」について悩みを持っている層の子どもへの不利の結合は、見過ごせないものである。この不安や悩みが、子どもの現状認識と将来展望に実際にはどう影響しているのか、逆にどのような生活・世帯状況が不安・悩みを与えているのか、そのことを明らかにすべきであろう。これら残された課題を意識しつつ、次節から筆者の行った聞き取り調査の結果を検討していこう。

2 生活保護世帯の子どもの生活

(1) 対象者の属性と世帯の状況—調査の概要も含めて—

本節から、実際に筆者が行った聞き取り調査をもとに検討を進めていく。調査項目で柱として立てたのは、生活習慣、学力、勉強への意識と学校体験、家族関係、友人とその他の人間関係、家庭の文化資本、将来展望などである。

調査時期は2002年8月から12月で、北海道内に住む6名の高校生と、その母親3名に対して聞き取り調査を行った。対象者は民生委員、知人等から紹介してもらった。インタビューは、許可が得られた場合は録音したが、対象者が話しやすい雰囲気を作るため、メモのみにしたことが多い。「生活保護世帯の子ども」という括りで調査をしているという事実は、それだけで子どもにとっては辛く、スティグマを与えるものになる可能性があったため、調査の際には十分配慮し、内容に関しても、「生活保護」や「貧困」といった事項は言葉にするのはできるだけ控え、対象者の過去・現在・未来の生活と意識を中心に質問し、生活保護についての話題に入る時は、話の流れを十分考慮して注意深く行った。対象者と信頼関係を構築し、多くのことを話してもらおうよう、調査は数回に渡って行った。

世帯の状況は、調査対象者の属性と共に、表4にまとめた。〈F3〉と〈F4〉の母親にはインタ

ビューすることができなかったため、世帯の客観的な情報を十分には把握できなかったが、子どもからの情報をもとに整理した。

調査対象者は2002年10月で高校を中退した〈M1〉以外は高校生で、すべて母子世帯の子どもであった。これらの高校は、おしなべて学力水準の低い、いわゆる底辺高であった。

現在、生活保護を受けている世帯は2世帯(〈F1〉・〈F2〉、〈F3〉)であり、1世帯(〈M2〉)が過去に受けていた。〈M1〉と〈F4〉の世帯は生活保護を受けたことはないが、〈M1〉の世帯は母親のパート労働の収入と児童扶養手当のみが収入であり(年収150～200万円)、〈F4〉の世帯は母親が病気で働けず、きょうだいからの援助(とおそらく児童扶養手当)のみで生活しているということで、いずれも低所得世帯とあって良い。また、〈M1〉の世帯に関していえば、その所得は生活保護基準以下である。

親の現在の職業に関してみると、安定した常勤の職に就いているのは〈M2〉の母親のみであり、他は無職が2名、パートが2名と、不安定な状況にある。父親も含めこれまでの職歴について見てみると、やはりここでも相対的に不安定な職業が多く見られる。

同時に家族構成員の変化と転居について見てみると、最も大きな変化を経験しているのは、〈F1〉・〈F2〉である。再婚前(母、〈F1〉、〈F2〉)、再婚後(継父、母、〈F1〉、〈F2〉、義弟、妹)、離婚後(母、〈F1〉、〈F2〉、妹)と、家族構成員は変化し、いずれも居住地は異なっている。また、〈M1〉に関しても、小2で親が離婚した後、最初は父親に引き取られるが、妹の不登校がきっかけとなって、中学卒業と同時に母親に引き取られている。

(2) 子どもの日常生活と学校生活

ここから、子どもへのインタビュー調査の結果の検討に入る。日常生活に関して見てみると、別の調査結果からは子どもたちの健康問題が注目されているが⁷⁾、今回の調査でも2名の対象者が幼い頃から病弱であり、現在に至るまで毎月何らか

表4 調査対象者の属性と世帯の状況

| 事例 | 性別 | 年齢 | 学校・学年 | 家族構成 (年齢) | 収入源 | 年 収 | 職 歴 | | 学 歴 | | 住 居 | 健康状態 | 離婚時の 年齢 | 離婚の原因 |
|-----|----|----|---------------|--|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------------------|---|-----|-------------|---------------------|-------------------------------------|--------------------------------------|--|
| | | | | | | | 父 | 母 | 父 | 母 | | | | |
| M 1 | 男 | 16 | 公立高校 中退 | 母 (44) 長女 (18) 次女 (14) | 給与 (月 14 万)、 児童扶養 手当 | 150 ~ 200 万 | 重機オペ レーター →トラック 運転手 | 紡績工員 →清掃 | 中卒 | 高卒 (定時制) | アパート (1DK) | 母健康 本人健康 | 本人小 2 | 借金、生活 苦 |
| M 2 | 男 | 15 | 私立高校 1年 | 母 (40) 長女(小 6) | 給与、児 童扶養手 当 | 約 320 万 | 中古車の ディー ラー | デパート 案内係 (結婚前) →事務員 (常勤) | 高卒 | 高卒 | 公営母子 住宅 (3 K) | 母健康 本人健康 (アレル ギー性鼻 炎あり) | 本人幼稚園 年長 | 夫の浪費。 学資保険ま で使い込ん だ。 |
| F 1 | 女 | 18 | 公立高校 3年 | 母 (39) 次女 (F2) 三女(小 1) | 生活保 護、児童 扶養手当 | 約 350 万 | 季節労働 (1 人 目)、自 営業 (2 人目) | セール ス、ス ナック店 員 (再婚 前) →自 営業→無 職 | 不明 | 高卒 | アパート (2DK) | 母健康 本人健康 | 本人生前 (1 回 目)、高 2 (2 回 目) | 失踪 (1 回 目)。夫の 女性問題、 DV、自己 破産 (2 回 目)。 |
| F 2 | 女 | 18 | 公立高校 3年 | (F1の双子 の妹) | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 母健康 本人健康 | 同上 | 同上 |
| F 3 | 女 | 16 | 私立高校 2年 | 母 (56) | 給与、生 活保護、 児童扶養 手当 | (150 ~ 200 万) ^① | マッサー ジ師 | 不明→清 掃 | 不明 | 中卒 | アパート (2DK) | 母病弱 (過 去に子宮ガ ン) 本人病弱 | 本人中 2 (小さい頃 から別居状 態) | 不明 |
| F 4 | 女 | 17 | 私立専修 学校 2年 | 母 (55) 長男 (36) 長女 (35) 次女 (22) ^② | 親族から の援助、 児童扶養 手当 | 不明 | 不明 | 不明→無 職 | 不明 | 不明 | アパート (2DK) | 母病弱 (高 血 圧、吐 血) 本人病弱 | 本人 4 歳 | 不明 |

注1) 生活保護基準をもとに筆者が算出した。

注2) きょうだいは皆、既に家を出ている。

の症状により通院し、毎年必ず風邪をこじらせて入院するという状況であった。この健康状態は、2名の学校での成績にも大きく影響してきているようであった。その他、子どもたちの日常生活に関する睡眠・食事・登校などについては、ほぼ問題は見られなかった。しかし住居に関しては、1DKのアパートに4人で住んでいる世帯もあり、全体的に非常に狭隘なものであった。個室を持ち、プライベートな空間で過ごすことはほとんど難しく、勉強机や布団に関しても個別には与えられていない対象者もいた。

子どもたちの学校生活は表5にまとめた。学校と勉強に関しては、ポジティブな経験、ネガティブな経験が共に語られ、一括りにするのは難しい。しかしながら、全ての対象者が学校でうまく立ち回れなかったことを経験しているのと同時に、勉強でのつまづきを経験している。

- ・「中学楽しくなかった。友達とかいなかったし…。」「男子はむかつく男子ばっかだった。助けてくれる人いなかった。全員。女子も。あそこは性格悪い人ばっか。あれダメ。」(〈F1〉)
- ・「…うーん、中学はあんま良くなかった。小学校で転校して、友達が変わって、中学では友達があんまりいなかった。」「小学校の頃は良かった。田舎で、みんなのんびりしてた。中1で転校したんだけど、ちょっと都会だし、みんな頭いいし、何だこの人たちは、って感じ。進度が違うのに、先生は『みんな、これもうやったでしょ』とか言って、やってないのに。転校生だっていうこととか考えてくれなかった。自分で何とか頑張った。でも、ほとんど勉強しなかった。」(〈F2〉)
- ・「昔は田舎に住んでた。小4まで。それで転校したんだけど、勉強の進度が全然違った。算数とか教科書違ったしとかで、学校行かなくなっちゃった。不安で行けなかった。3学期から行くようになったけど。うちの中学は何か陰湿な感じだった。今の高校は成績とか

気にしない子が多くていいけど。中学の頃は成績の良い子たちが集まって点数見せ合ったり、良い人・悪い人が分かれてた。」(〈F3〉)

〈F1〉、〈F2〉、〈F3〉は転校し、新しい環境に移った際に、なかなか馴染めず、その学校生活はつらいものであった、と語った。そこには、友人ができなかったことや、前の学校と進度の異なる授業について行くことができなかったことなどの事実があった。「誰も助けてくれなかった」(〈F1〉)、「何とか自分で頑張った」(〈F2〉)という言葉からは、教師などからのサポートがない状態の中、かなりの孤立感を感じていたであろうことが推測される。

次の2人は、教師や学校に対する違和感・不満を強く挙げていた。

- ・「めんどくさかったんですよ。学校の法律がいやだった。先生がうるさかった。髪の色とか。態度が悪い、っていわれたり。なんか、先生に反抗しかったんですよね。」(〈M1〉)
- ・「(高校は)つままない。ほんっと辞めたい。学校祭とか、くそ。校則とかやばすぎる。厳しすぎる。先生がいやだ。何かきもいやつばっか。授業も中学にくらべて下手くそ。やめたいけど、就職できなくなるから行ってる。」「小学3年くらいから算数とかわかんなくなった。中学では9教科のテストでも合計100点いったことない。今までで最低は5教科合計で27点っていう時。中2。」(〈M2〉)

中学2年から学校を休みがちだった〈M1〉は、校則と教師に対する嫌悪感から学校に行けなくなり、高校でも出席日数が足りずに留年し、2回目の1年生の2学期で中退している。〈M2〉も、同様に校則と教師に対して反感を覚え、「ほんっと辞めたい」と語っているが、「就職できなくなるから」何とか通学している。しかし、低学力は深刻な状態であり、現在も留年のおそれがあるという。中学でも高校でも授業中は居眠りをしていることが多く、定期テストでも、「どうせ0点だか

表5 対象者の学校生活

| 事例 | 学校・学年 | 成績 | 小学校 | 中学校 | 高校 | 現在の友人関係・恋愛 |
|----|--------------|-----------------------|--------------------------------------|--|--|--|
| M1 | 公立高校 中退 | 小：中の下 中：下 高：下 | ほとんど覚えていない。 | 中2から不登校。「先生がいやだった」。勉強はほとんどしなかった。受験勉強のみ、「がんばった」。部活（サッカー）や友人とは楽しく過ごした。 | 教師に不満を覚え、不登校、留年、中退。勉強は全くしなかった。友人や部活は楽しかった。 | 「いつも4～5人の友人と一緒にいる」。中学時代からの友人。夜遅くまで過ごす。「友達という時が一番楽しい」、「ワルばっか。頭いい人はひとりもいない。カツアゲとかはほしくないけど」これまで交際人数は2人。初めてセックスしたのは中1。現在、彼女はいない。 |
| | | | 小2で親が離婚。父親に引き取られる。養育は主に祖母と父の交際相手による。 | 母に引き取られる。 | | |
| M2 | 私立高校 1年 | 小：下 中：下 高：下 | いじめられていた。小3の頃から算数はほぼわからなくなる。 | 定期テストは9教科合計で100点に達したことがない。部活（バスケット）や友人とは楽しく過ごした。 | 教師と校則に不満を感じ、「つまらない。ほんとと辞めたい」。友人とは楽しく過ごしている。 | 「クラスの友達という時が楽しい」が、アルバイトで忙しく、学校帰りや休日に友達と遊ぶことはあまりない。近所の中学時代の友人とも連絡を取っていない。これまで交際経験はない。「度胸がない」。 |
| | | | 幼稚園年長時に両親離婚。離婚後、3年ほど生活保護受給。母と生活。 | その後はこれまで同じ住居で | | |
| F1 | 公立高校 3年 | 小：中の下 中：下 高：中の上 | 田舎の小学校で、男女一緒によく遊んだことが思い出。 | 入学直前に転居してきて、友人・部活など馴染めず、辛い思いをしてきた。勉強はほとんどしなかった。美術が得意だった。 | 「高校が一番楽しかった」。部活（テニス、美術）や友人と過ごす時間は楽しい。成績は中の上。 | 友達はいるが、親友は「…微妙」。これまで「出会い系サイト」を通じて、9人と交際した。高2の時に妊娠している。相手は現在の彼氏。高校を中退し産むつもりだったが、中絶した。中絶費用は援助交際で作った。 |
| | | | 小2で母が再婚。転居し、継父・義弟と暮らし始める。 | 高2で親が離婚。現在の地域に転居。 | | |
| F2 | 公立高校 3年 | 小：中の下 中：下 高：中 | 小学校は良かった。「田舎で、みんなのんびりしてた」。 | 〈F1〉と同様、学校には馴染めなかった。「中学の話はやめて」。理科の先生が好きで、理科だけががんばったが、他の勉強はほとんどせず。 | 友人とは楽しく過ごしているが、2時間の通学時間が寂しい。勉強は「けっこう真面目にやってる」。 | 友達とは学校では楽しく過ごすが、休日に遊ぶほどではない。現在、「出会い系サイト」で出会った34歳の男性と交際している。始まりは援助交際であった |
| F3 | 私立高校 2年 | 小：下 中：下 高：中 | 4年生まで田舎の小学校で、「みんなのんびりして良かった」。 | 「うちの中学は陰湿」と語るが、友達も多く、合唱部の活動など良い思い出も多い。勉強は「全然しなかった」。 | 中学と比べ、いろいろな人がいて、楽しく感じている。教師は「甘い。厳しくない」。成績は中学の頃より上がった。 | 学校帰りに食事をしたりと、友達との「つきあい」は多い。友達と2人で東京に行く予定がある。これまで交際経験はなく、恋愛には否定的。「たぶん好きな人は見つからない」。 |
| | | | 小さい頃から父とは別居。小4で現在の地域に転居。中2で両親が離婚。 | | | |
| F4 | 私立専修 学校2年 | 小：下 中：下 高：中 | 病気で休みがち | 病気で休みがちで、勉強はできなかった。友人とはもめたこともあったが、今でも会うことがある人もおり、「今ではいい思い出」。 | 「中学のほうが良かった」、 「先生が注意しない」、勉強は資格取得のため、「それなりにがんばってます」。 | 高校では、人間関係でもめることもあるが、皆で話し合っ、何とかやっているとのこと。現在、中学の同級生だった人と交際している。 |
| | | | 4歳で親が離婚。大きな転居・転校はなし。 | | | |

ら」と思ってしまい、勉強する意欲が出ないことが多いという。

対象者の日常生活と学校体験に関して、子ども自身の日常生活そのものについては、あまり乱れは見られなかったが、住居が狭隘であることがひとつの共通点であった。数十年前に比べれば格段に生活水準の上昇がわが国でも、住居に関しては明らかに所得が反映されており、低所得世帯の住居は非常に狭隘なものであるといえよう。

学校生活に関しては、全員に共通することとして、学校での何らかのつまずきの経験と、低学力が挙げられた。転居・転校に伴って、特に「田舎から都会へ」という移動により学校と同級生に違和感を覚え、なかなか馴染めずいたり、校則やそれを遵守させようとする教師に対して不満を持ったりするケースが見られた。

そして、その結果としてはほぼ全員が早期の段階から勉強面での困難に直面しており、それは現在に至るまで一貫していた。この原因に関しては、先に挙げた学校への不適応や家庭環境の変化など様々に考えられ、断定することはできないが、ひとつ共通することとして、親からの勉強への働きかけが少ないことが挙げられる。「(母親は)『人生経験が大事』とか『夢を決めなさい』とか言って、勉強にはうるさくなかった」(〈F3〉)というように語る対象者が多く、〈M2〉以外は親から勉強するようにいわれたことも、一緒に勉強したこともほとんどなかったという。

3 生活保護世帯の子どもの生活意識と将来展望

(1) 不安・悩みと生活意識

先に見たように、対象者の世帯は低所得であり、両親は離婚していた。このような世帯状況において、子どもはどのような意識や思いを抱えているのだろうか。

- ・「前の家は広かった。1階がお店と居間で、2階がうちの部屋って感じ。よくわかんないけど、向こうの時(離婚する前)は店、うま

く行ってたと思う。でも離婚のことでダメになっちゃって…。こっち来ることになった時、最初はうまくいくと思った。でもダメだった。お店見に行った時とか、お客さんほとんどいなくて、パラパラ来るくらいで、失敗だと思った。…わかんないけど、生活はたぶん厳しいと思うよ。生活保護とか受けてるし…。…よくわかんないけど。大変なんじゃない？」(〈F1〉)

- ・「前の店に居た頃の方が、生活、楽だった。こっちに来た時は、無理でしょって予感してた。これからやってくって時。前の家では机が2つあった。今の部屋じゃ、机2つは置けなくて捨てちゃった。2人部屋はいやな時もある。…今は、ふたりでひとつの敷き布団だし。」「生活保護って、細かい規則とかありそうで嫌だ。学校の授業でやったんだけど、大阪でお年よりがクーラー付けられなくて、死んじゃったとかの話聞いて、ひどいな、と思った。できれば受けたくない。友達には言ってない。」(〈F2〉)
- ・「収入は少ないと思う。お母さんに15万くらい貸してるし。けっこう大変だと思う。」(〈F3〉)

〈F1〉と〈F2〉は、2002年4月に母親の店が倒産してから収入が途絶え、生活保護を受けることになり、生活保護基準に従って現在の住居に転居し、机を捨て、ふとんを共有せざるを得なくなった。生活保護に対しては、漠然とした思いながらも、やはり「受けたくない。友達には言ってない」という印象を持っており、「恥ずかしさ」を伴うものであった。

〈F3〉に関しても、母親があまり働いていない、という話のくぐり、生活保護を受けてるかどうかを尋ねたが、「…受けてる」とそれまでの快活な受け答えから一転して暗い表情になってしまった。そして、それを何とか否定するように、「(母親は)私を高校行かせるために、しょうがなくやってるって言ってた。高校卒業したら、自分で

切るって言った。ひとりでやってくなら何とかなるらしいから」と述べ、やはり生活保護の印象は決して良いものではなかった。

他の3人の世帯は生活保護を受けてはいなかったが、やはり低所得である。そのことに関連した意識を見ていこう。

- ・「部屋は正直狭いっすよ。けっこう本気でひとり暮らししたいっす。今だと、常に誰かと一緒って感じですから。ひとりになれない。」「こづかい少ない。2万にして欲しい。周りのみんなは3,000円とかだけど。」「うちの収入とかは、ちょっとわかんない。中の下くらいだと思う。」(〈M1〉)
- ・「自分の部屋が狭い！ほんと狭すぎる、あれは。1部屋はあるけど、仕切りが襖だし、机とかでほとんど取られてる」「服は、ジャージ2本しか持ってない。ジーパンとか持ってない。買いに行く暇ないし。バイトやってなかったら、小遣い3,500円だからなんも買えない。お母さんは、Tシャツとかパンツとかしか買ってこない。ジーパンとか高そうだから買ってこない。」「収入とかわからない。教えてもらってるわけじゃないし。うーん、普通…かな。」(〈M2〉)
- ・「今、家は相当きついです。お母さん働けないから、上のきょうだいがお金を集めてくれて、何とかやってるみたいです。」(〈F4〉)

〈M1〉は家族4人で1DKの住居に暮らしているが、そのことに対して「ひとりになれない」と不満を述べ、ひとり暮らしをすることを望んでいる。そのため、フリーターになろうとしているが、求職活動にもなかなか意欲的に取り組めないという。〈M2〉も同様に、住居やこづかい、服が買ってもらえないことなどを不満に挙げている。「これまでジーパンをはいたことがない」と、非常に不満気に述べていた。

〈F4〉は、母親が働けず、きょうだいの援助に

頼っているという状況をよく認識し、自身はかなり切り詰めた生活をしてきた。「わがままあまり言えませんでした」と語っており、携帯電話を持たないことや、習い事に行けなかったことを悔しく感じているようであった。

以上の語りから、生活保護を受けているという事実に関しては、子どもたちはやはり「言いたくない」、「恥ずかしい」といった気持ちを与えていることが確認された。生活保護を受けることは、子どもに対してもスティグマを感じさせるものであった。生活保護を受けていなくても、住居が狭いことや、ものを買えないことは「みじめさ」を感じさせるものであり、他の子どもたちに比べ、より多くのことを我慢しなければならず、これまで辛い思いをしてきていたようであった。

また、両親の離婚という経験については、「(お母ちゃんの)シルバニアファミリーで遊ぶ時とか、家族が揃ってるのに憧れたりしました」(〈F4〉)といったことも語られたが、大半のものが幼い頃に経験しており、「ちっちゃい時から離婚してたの知ってたから、別に何とも思わなかった」(〈M2〉)と語られることが多かった。しかし、〈F1〉、〈F2〉は継父との仲がうまくいっておらず、また離婚する前の生活に関して、「平和じゃなかった」(〈F1〉)、「(お母さん) あん時は、ボロボロみたいな」(〈F2〉)と述べており、家族内での争い事を経験した上での離婚であった。そのため、「離婚して良かった」と語っている。

(2) 将来展望

次に対象者らの将来展望に関して、検討を進める。まず、すでに具体的な進路選択を迫られている、高校3年生の〈F1〉と〈F2〉について見ていこう。

「来年は、彼氏の実家に住む。」「彼氏、来年、専門学校卒業したら、東京で実習みたいの2年間やらなくちゃいけないことになっちゃった。結婚は…、いつになるんだろう…。3年後かな。ちょっと不安。再来年は彼氏の家には住めない。向こうで就職しても、いる意味がない。彼

氏が東京に行っちゃうから。それで、私はこっちに帰ってこようと思う。友達が再来年はこっちで就職してひとり暮らしするみたいだから、一緒に住もうって言うてるけど。帰ってきても、結婚するまでのつなぎの仕事しかできないから、たぶん簡単にたくさん稼げる仕事をやると思う。風俗とかじゃないよ。オミズ。やると思う。」「向こうでは、パチンコ店か飲食店を狙ってる。本当はデパートで服とか売りたいけど、それはないみたい。ガソリンスタンドも免許がないから無理だった。」「ほんとは、美術関係の専門学校行きたかった。美術部の先生に勧められてて、うちも行きたかったんだけど、いつのまにか就職の方に行っちゃった。」「高校楽しかったね。『高校では、はじけられる』って言うてたけど、本当だったね。大学がもっと楽しいのなら…、進学したいね。…本当は。お金あったら、今すぐしたいね。短大とか行ってみたいな。」「この前、『東京について行きたい』って彼氏に言ったら、『そこまでして夢を捨てる女は嫌いだ』とか言われた。『お前の周りの友達、みんな夢あるだろ？ お前はないのか？ 小さい頃からの夢、あるだろ』って。…うちは、とにかく求人票見て、できそうな仕事を探すしかないのに、そういうこと言われて…。」(〈F1〉)

〈F1〉は、現在交際している彼氏と結婚することを前提に、将来を設計している。現在は、彼氏の実家の地域で仕事を探しているが、一年間で辞めるつもりであり、目指すところは結婚し専業主婦になることである。しかしながら、本人も不安を感じているように、3年後に結婚するという約束は決して確証のあるものではなく、それまでの仕事・居住地に関しても、明確な展望は見えていない。

もともとは美術の教師になるのが夢で、専門学校に進むことも考えていた。しかし、「いつのまにか就職の方に」傾いてしまい、現在は「とにかく求人票見て、できそうな仕事を探すしかない」という状況である。このような現状の中で、本当

は進学したい、と語った。

「最初は大学とか専門学校とか探してたけど。映画・美術・放送関係。まだ、どうしようかと思って。最終的には、映画の裏方で美術スタッフとして働いてみたい。」「東京の学校に行きたい。札幌にもあるんだけど、やっぱり向こう行かないとチャンスないし。でも現実的に考えて、東京の道は難しいかなあ。経済的に。」「生活がギリギリだって聞いたときはショックっていうか…。だから一番良いのは就職なんだけど、自分はイヤだから。(中略)でも現実的に考えて、就職すると思う。」「就職するなら、(彼氏のいる)愛知です。向こうは仕事が多いだろうし、フリーターでやっていくとしても、時給高いし。東京にも近いし、彼氏ともいれるし。どっちにしろ、北海道にはいない。求人票は愛知からも来てて、それ見て探してる。別れる心配はないことはないけど、そしたらどうしよう。別れた先は考えてない。」(〈F2〉)

〈F2〉は映画が好きであり、裏方の美術スタッフとして働きたいという希望を持っているが、経済的な問題が大きな障壁となっている。生活保護では進学費用などは援助されず、自助努力によって入学金等を用意しなければならない。しかし、月々の保護費から専門学校入学の費用を用意することは、非常に難しいのが現状であろう。そういった現実を認識してか、「現実的に考えて、東京の道は難しい」と考えており、授業料を貯めるために就職することを考えている。

また、「生活がギリギリだって聞いたときはショックっていうか…」という言葉からも、描いていた将来が、経済的貧困によって可能性を狭められる現実に対して、相当やるせない思いを抱えていることがわかる。

進学するにしろ、就職するにしろ、北海道にはいないという。これは姉(〈F1〉)とも共通することで、「自分の部屋が欲しい」、「自立したい」という思いがある。

次に高校2年生の〈F3〉、〈F4〉について見ていく。

「短大行こうかなーって思ってる。栄養士になりたくて。でも微妙。迷ってる。看護婦にもなりたくて。でもうちすぐ風邪ひくから。患者さんにうつしちゃいそうで。この前も、風邪治るのに1ヶ月かかった。専門学校もいいなあ。私、短大の受験勉強とかできなさそう。いったん就職して、それでお金貯めて、それから学校行くのもアリかなとか思ってる。学校の先輩とか、いろいろ職変えてる人もいるし。」(〈F3〉)

〈F3〉は2年生ということもあって、進路はまだ決定しておらず、いくつかの選択肢を挙げているが、基本的には短大へ行く意志が強く、その後も、栄養士、看護婦、介護ヘルパーなど、医療・福祉関係の職ということでは定まっているようであった。ただ、短大入学のための受験勉強への不安から、入学が比較的容易な専門学校に入ることも視野に入ってきている。しかし、やはり経済的にゆとりがあるわけではなく、一度就職して学費を貯めてから、進学するという道も考えている。

そして、〈F3〉もまた、高校卒業後はひとり暮らしをすることを考えている。その理由は、母親が家の掃除、整理・整頓をしてくれないためだという。

また、結婚に関しては、「結婚は女にとって不利だ」、「もし結婚しても、うまく行かなそうだったら離婚する」と、かなり否定的であった。

「将来は保育士になりたいと思ってます。だから、高校卒業したら今(の学校)と同じ系列の専門学校に行きたいです。」「お母さんとかお父さんがいない子もいるだろうから、そういう子に愛情を注いであげたいなーと思って。ただ、うちはお金なくて、今は何とか食べていけるくらいなんですけど、授業料とか入学金とかは、お母さんは難しいって言ってて、かなりやばいみたいなんです。奨学金とかあるといいん

ですけど…。なりたいののに、なれないのは、辛いです…。」「家を出たいと思ってました。でも、きょうだいみんな家出ちゃって、私がお母さんと一緒にいないと、もし何かあったら困るので…。」(〈F4〉)

〈F4〉は将来、保育士になりたいと考えているが、やはり経済的な問題が大きく立ちはだかっている。「かなりやばい」と述べているように、現実的には進学費用を援助してもらうことは難しいと感じている。

〈F4〉もまた、家を出たいと思っていたが、つい最近もトイレで吐血していた母親ひとり置いて出て行くことはできないと考えている。

次に、現在、高校1年生の〈M2〉に関して見てみる。

「高校出たら、就職する。…何も考えてないけど。場所は…、ここから近い方がいいかな。家、出ない方が金かからなくていいかな。」「大学行っても変わらないと思う。就職決まりやすくなるとかなさそう。でも、自分は就職厳しそう。今回、テストで赤点4つか5つあった。別にどうでもいいけど…。これじゃ、就職できないかもしれない。(中略)パンフレットでトヨタとか見たけど…、まだよくわかんない。体動かす方がいい。」「本当はひとり暮らしがしたい。」(〈M2〉)

高校1年生ということで、まだ具体的な進路選択を迫られているわけではなく、本人は「何も考えてない」と述べている。しかし、高校卒業後は就職することを考えており、漠然としたものではあるが、「体動かす方」という、ある一定の方向性は見えているとも考えられる。

障壁のひとつは、学力問題であろう。これまでの生活の中で、勉強する習慣が全くなく、高校のテストでも常に赤点を取っている。授業中は居眠りをするか、友人としゃべっており、「今、家で勉強するのはありえない」とのことである。本人自

身、この現状を変えていくことの難しさを非常に強く痛感しており、「上に上がる自信がない」と語っている。本人だけではなすすべがなく、今の状態から勉強の習慣をつけ、成績を上げていくことは、何らかのサポートがなくては難しいのが現状であると考えられる。

最後に、〈M1〉について見ていこう。

「うーん、20歳まで、いや22までフリーター。場所は…、どっか。でも札幌いいすね。一日中遊んでたい。すすきのとかな、初めて行った時、びっくりした。すごーって。友達と高校入ってから行きました。それで23歳頃からは、ホスト。40…、35歳くらいまで。その後…。どうしよう。うーん。」「ひとり暮らししたいっすよ。何でもやりたい放題ですよ。みんないつかはしたいんじゃないですか。まだ先の話ですけど、10代のうちに始めたい。」(〈M1〉)

〈M1〉は中学では不登校状態にあり、高校でも留年した後、中退してしまった。現在はアルバイトを探しているが、なかなか見つけられずにいる。そのような状況のもとでは、以上のように将来の展望は明確な形になってはいない。筆者の「定時制高校は?」、「サラリーマンは?」、などの問いかけ全てに対し、とりあえず「いいっすねー」と答えるが、自分が何をやりたいのか、漠然とした形でも見出せずにいるようであった。本人から語られた「人生設計」は、22歳までフリーターをして、その後、ホストクラブで働く、というものである。

家を出て、ひとり暮らしをすることを望んでいるが、それは今の住居が狭隘で、住み難いものであることが大きな理由であった。そして、本人に収入のない現在の状況からすれば「まだ先の話」と言いつつ、いずれ何の経済的な後ろ盾や蓄えがないまま、家を出てしまう可能性もないことではない。「とりあえず」アルバイトをして、「一日中遊ぶ」という暮らしに憧れざるを得ないのが現状である。

以上みてきたが、調査対象者らが具体的な将来を客観的な可能性をもって描くためには、非常に多くの困難があると言えよう。このことは、子どもたちの持つ選択肢の少なさが関係している。経済的な問題や、学力・学歴によって選べる将来は相対的に狭くなり、目標を見つけること、そしてそれを実現するには多くの困難がある。さらには、将来が見えなくなった結果、目の前の利益に気を取られ、「とりあえず」の未来を選択してしまい、より不安定な生活に入っていくことが危惧される対象者もいた。また、全員が高校卒業後にひとり暮らしをしたいと語ったが、このような状態でひとり暮らしを始めてしまうことは、生活が一層不安定化する契機になりうるとも考えられよう。

3 まとめにかえて

本稿では、生活保護世帯を含む低所得世帯の子どもの状態を、筆者の行った子どもへの聞き取り調査を通して、明らかにしようと試みた。その中でまず第一に、子どもたちにとって、やはり世帯が低所得であるということは、直接的に悩みの原因となっていた。所得が低いということによって、様々なところで耐え忍ぶことを要求され、今回の調査対象者には、通学のためのバス代を親に要求することができず、それを補うために援助交際を行っていたケースがあった(〈F2〉)。この前後には母親との確執があり、低所得であることが問題を生み、その問題がまた問題を生むといった悪循環が見られた。2節のアンケート調査で見られた、複雑に絡み合った子どもの悩みの具体的な形というのは、このように互いに関係しあい、問題や不利が連鎖した形で存在していると予測される。

第二に、経済的なこと以外でも、現在に至る過程において転居や転校、さらには家族の離散・集合をも経験してきた。転校により、授業についていけなくなる、友人関係でつまづくなどといった対象者が見られ、また〈F1〉・〈F2〉は継父と、〈M2〉の妹は8年ぶりに一緒に暮らすことに

なった母親との仲がうまくいっていなかった。全ての低所得世帯の子どものこういことを経験しているわけではないであろうが、低所得世帯での生活を余儀なくされてきたという事実は、その子どもたちがさまざまな困難や状況の変化に遭遇してきた可能性がより高く、また、その新たな環境に適應することの難しさがあると推察される。

第三に、今回インタビューした子どもたちにおいて、明白に共通していたのは、家庭学習時間がほとんどなく、低学力であるという事実であった。これは高校生になってからのことではなく、小学生の早期の段階から現れてきていた。もちろん、低学力・低学歴であっても、自己の夢を実現し、安定した生活を営む可能性がなくなるわけではないが、選択肢が狭められることは疑いのような事実である。

そして第四に、子どもたちはその狭められた選択肢の中で、自身の将来展望を明確に描くことの困難に直面していた。低所得、低学力（低学歴）という事実がそのひとつの要因となっており、経済的な基盤や学力不足によって選択できる進路が限られ、「とにかく、求人票見て、できそうな仕事探すしかない」（〈F1〉）という状況に追いやられることになる。

しかしながら、将来展望が描けなくなっていることの要因というのは、低所得や低学力だけに求めることのできない、もっと複雑で入り組んだものであろう。例えば、対象者の〈M1〉は具体的な展望を語るができず、将来がリアリティの伴わないものとしてしか感じられていないようであったが、母親は〈M1〉が高校中退したことに関して、「残念ですけど、本人が決めたことですから」と語り、特別引き止めるようなことはしていなかった。妹が不登校で、母親も自身の就労問題と家庭の経済問題に追われ、子どもに対して余裕を持って接することができないこともまた、現状を打開する糸口が見えなくなっている要因かもしれない。

この将来展望を持ちえていないという事実は、生活保護・低所得世帯の子どもの将来に関して、

決して楽観視してはいけないことを意味する。子どもたちの周囲には、将来の展望を妨げるいくつかの障壁が存在している。大きなものとして世帯の収入が挙げられるが、家族関係、学校への適應、子どもの学力などの諸要素が、長期間で互いに連鎖し合うことで障壁として形を現し、いつの間にか子どもたちの周囲に張り巡らされてしまっていると言える。子どもたちは自分の将来を考えた時に立ち足る壁に気付かされ、自身と頼れない家族に対して無力感を持っていると考えられる。子どもたちも多くのことをあきらめ、我慢していると同時に、現状から「逃げる」ように計画性のない行動を取っているように見受けられる面もあった^⑧。そういった中で、「とりあえず」就職し、ひとり暮らしをすることを希望していたが、これは自立への経済的な後ろ盾がないまま社会に出ることであり、その後、不安定な生活に陥ってしまうことを予感させる。

不登校、低学力、高校中退、将来展望が描けないといったことは、子ども一般に共通する現代的な問題であろう。しかしながら、本論文で明らかにした事実は、貧困・低所得世帯の子どもには、その問題が連鎖する形で重層的に現れ、その結果として将来の選択肢が狭められているということである。この事実は、子どもが親世代の貧困を継承してしまう可能性が大いにあることを示唆する。その中で生活保護制度は所得保障、高校進学保障という意味では一定の効果があると思われたが、やはり子どもにとっても「言いたくない」というスティグマを与えるものでもあった。そういったスティグマを克服するような所得保障制度の構築は最重要の課題であるが、同時に子どものある一側面を見て判断するのではなく、世帯の状況も含めてトータルに把握した上で、何らかの個別的な援助を行うことが必要であろう。

注・参考文献

- (1) 杉村宏「子ども・家族・貧困—社会階層と子どもの進路を中心に—」白沢久一・宮武正明編著『生活関係の形成』勁草書房、1987年、高山武志

- 「教育と貧困」江口英一編著『社会福祉と貧困』法律文化社、1981年、青木紀・杉村宏・松本伊知朗・野崎哲也「現代社会の子育てと社会階層」『教育福祉研究』第2号、1993年など。
- (2) 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機』2001年 有心堂。
- (3) 長谷川裕「生活困難層の青年の学校『不適應』」久富義之編著『豊かさの底辺に生きる』1993年 青木書店。
- (4) 西尾祐吾『貧困の世代間継承に関する研究』相川書房、1999年、青少年福祉センター編『強いられた「自立」』ミネルヴァ書房、1989年、高口明久、生田周二『養護施設入園児童の教育と進路』多賀出版、1993年、松本伊知朗「養護施設卒園者の『生活構造』」『北海道大学教育学部紀要』1987年、花島政三郎『教護院の子どもたち』ミネルヴァ書房、1994年など。
- (5) この調査は、北海道民生委員児童委員が調査主体となって実施されたものである。小学2年、小学5年、中学2年の子を持つ親と、小学5年と中学2年の子どもに対して行われ、親に対しては4市2町1023名、子に対しては5市1町967名から回答が得られた。詳細な結果に関しては、北海道民生委員児童委員連盟『子どもの未来を創る基本調査報告書』2001年、栗田克実「北海道における子どもの生活状況」北海道大学大学院教育学研究科 修士論文 参照。
- (6) 「家の収入や職業」について悩みが「ある」と回答したのは、全体の22.6%である。
- (7) 青木紀「調査ノート：貧困の世代的再生産の構造(1)―北海道A市における離婚母子世帯分析―」『教育福祉研究』第6号、2000年。
- (8) 一例として、対象者のひとり(〈F1〉)が、高校2年時に意図的に妊娠し、高校を中退して、結婚しようとしていたことが挙げられる。
(北海道大学大学院教育学研究科修士課程)